

岐阜方言のオノマトペ表現

Onomatopoeia in Gifu Dialect

山 田 敏 弘

YAMADA Toshihiro

lingua@gifu-u.ac.jp

1. はじめに

日本各地にさまざまな方言語彙が存在するように、擬音語や擬態語など、いわゆるオノマトペ表現にも各地の方言がある。

このような方言のオノマトペ表現は、川越 (2005) で主張されたような方言としての独自性という価値に加え、東日本大震災の後にボランティアとして入った各地から派遣された医師や看護師を悩ませた (竹田 2012) ことから、災害時の病状を訴える手段としての理解の必要性も、今日、認められている。

しかしながら、現在のところ、このようなオノマトペ表現について、特に岐阜県方言に関し体系的な方言的見地からの研究は進んでいない。それは、オノマトペ表現のもつ音象徴的な性質により、その規範性の定め方が難しい点がある上、方言的特徴をもつ語として認識度の低く、方言集などでの収集が進んでいないことが関与していると思われる。

本考察では、①岐阜県内各地方言集に見られる方言オノマトペの記述の分析、②各地での聞き取り調査の結果との照合、③岐阜方言話者である筆者の内省を通じて、岐阜県内で用いられる方言オノマトペの特徴を総合的に記述する。

2. オノマトペ表現の扱い

オノマトペを厳密に定義することは容易なことではない。もちろん、音や声を捉え擬した擬音語と、音が直接には知覚されない様子や動きを表現した擬態語からなるとの見解は、広く共有されるものとなっている。そのため、時計の秒針の出す「コチコチ」や猫の鳴き声である「ニャー」が擬音語に含まれ、赤ん坊の歩く様子である「ヨチヨチ」や焼きたてパンのやわらかい様子を表す「ふっくら」などが擬態語であることは、通常すぐに理解される。

その一方で、小野正弘 (2007) は、次のような境界的な例を指摘している。

- (1) 暑いので、ざあざあ水を浴びている。(小野2007:13)
- (2) ぶちぶちをつぶす。(同:14)
- (3) あまりのお追従に、しらじらとした気分になる。(同:15)
- (4) 雨は蕭々と降っている。(三好達治「大阿蘇」)

(1) は、「音を伴ったものなのか、そうでないのか、判定に困るもの (小野2007:13)」である。ただし、これは、擬音語と擬態語との区別において「判定に困る」というものであり、オノマトペとして扱うには差し支えない。(2) は、「通常の言葉として使っていて、何かの様子を表すための言葉として用いているわけではない (同:14)」が、明らかにオノマトペとしての、「気泡をプチプチ潰す」などとの関連性があり、オノマトペの転成名詞として扱わなければならない。

(3) は、「白々」という「現実に闇夜がだんだん白くなってい(同:15)」く様子とも語源とも離れていて、「オノマトペという語群を区別する理由そのものがなくなり(同:15)」かねない。同様に「いよいよ」「おずおず」「しずしず」「しみじみ」「しめしめ」「つくづく」等の畳語も、語源を遡ればオノマトペとの共通点はあるものの、現代語の感覚からすれば、含めることでオノマトペの体系を「かえって全体を不均一なものにしてしまうことになる(同:17)」。つまり、現代語において、これらはオノマトペではないとするメリットが大きい。

さらに語種の問題もある。(4) のような「蕭蕭」は、すなおに日本語のオノマトペとして認めにくい。その理由が漢字で書けるからというところにあるとすれば、それは、必ずしも明解な基準をもたらしてはくれない。「煌々と照る太陽」は、日本語として「昼間でもネオンサインが煌々としていた」などとは言えても、幼稚園児が「おひさまが煌々としてる」のようにはふつう言わないことからわかるように、文体的な制限があるものが多い。これは、「びかびか」や「きらきら」のような純正のオノマトペと比較すると、漢語に由来する語はオノマトペとして認めにくいということへとつながる可能性を示す。なによりも「こうこう」という音は、日本語の語感で太陽の様子とは結びつかない。

一方で、小野(2007:512)が指摘するように、「列車が轟々と行き過ぎる」や「土煙が濛々とあがる」のような漢語は、日本語としても受け入れられている。つまり、漢語をすべてオノマトペから排除することはできないのである。

これらの先行研究での指摘を踏まえ、本考察では、次のものをオノマトペとして捉え収集した。

- ① 俚言形のみを取り上げ、現在共通語としても使われるものは、紙幅の都合により除外した。ただし、形として共通語に同じ形式があっても意味が異なるものについては採録した。
- ② 語源がはっきりしないものがあるため語源は問わず、漢語起源が疑われるものも含む。
- ③ 派生動詞・派生名詞については、原則として除外した。ただし、動詞として記述されていても、語幹部分が切り出せるものは含めた。
- ④ 幼児語として限定された使用場面をもつものについても、今回、オノマトペとしての特徴を有するものについては考察の対象とした。

また、考察の手順としては、第一に意味分類によって記述をおこない、その中で、他地域からの伝来によって当地でも使われるようになったものか当地独特なものか、類似形式との音の対応はどのようであるか、どのような派生形態を有するかなどを検討することにする。

3. 各地方言集に見られる擬音語

岐阜県内各地市町村史、ならびに、各地でまとめられた方言集から、意味別にオノマトペを拾ってみる。まず、音や声を擬した擬音語を挙げる。

3.1 人間の発する声を捉えたオノマトペ

共通語としても用いられる、「軽口を叩くさま」を表す「ぼんぼん」は、当地でも『大垣市史』などに記述されるが、そのほかにも、当地には、次のような人間の発する声を捉えたオノマトペが記述される。

- ・ ウザウザユー 《句》 ぐずぐず言う。[美濃大垣:37]
- ・ ドブドブ／ぶつぶつ [新修関:913]
- ・ ドブドブ 《副》 ぶつぶつ。文句が多い様子。[美濃大垣:201]
- ・ ケンケンユウ／口やかましく言う [新修上石津:733]

「ウザウザ」は、「ぐずぐず」とは異なるが、『日本方言大辞典』によれば、「ぶつぶつ」の意味で

富山、兵庫、和歌山に使用が見られる。また、「口やかましいさま」を表す「ケンケン」も新潟や岡山での使用が記述される。ただし、「ドブドブ」については、管見の限り、他県での使用は確認されていない。

音からの印象として、「ウザウザ」は「ぐずぐず」と比較しても、同様に有声音が連続し、重苦しい印象が得られる。また、「ドブドブ」は、偶数音に無声音を含む「ぶつぶつ」よりもうるさい感じがする。一方、無声子音で始まる「ケンケン」は、甲高い様子が表されている。

このようなオノマトペの特徴としては、動作の状態を表すオノマトペに対応する動作自体を表す派生動詞が多く見られることも挙げられる。上述「ウザウザ」に対しては「がみがみ叱る」の意味で「ウザル」が、「ドブドブ」に対しては「ぶつぶつと文句を言う」の意味で「ドブック」がある。特に、「ドブドブ」については、動詞形態の方が多く記述される（『大野町史』、『藤橋村史』、『池田町史』、『新修関市史』、『美濃大垣方言辞典』）。このような動詞への派生は、動物や昆虫の鳴き声などには見られず、人間の動作を模したオノマトペの大きな特徴となっている。

「ケンケン」は、動詞形としての記述は見られないが、『東白川村誌』および『西白川村史』に、「あらあらしい（荒々しい）小言」との記述が見られ、「ケンケン」自体を名詞として記述している。鳴き声から「コンコン」を「狐」の意味で用いたり、クラクションの音から「車」を、特に幼児に対し「ブーブ」と言うなどは、全国広く見られることで、オノマトペから語形変化無く名詞に転成することは自然なことである。

逆に、動詞形のみが記述され、その元となるであろう畳語形が記述されないものの中、特記すべきものもある。

- ・ フタツク／ぶつぶつ言う [明宝：1098]
- ・ フタツク・ブタツク／ぶつぶつ言う [美並：762]

この「フタツク」は、「フタフタ」という形の記述はないが、音として興味深い特徴をもっている。それは、無声子音の連続であることである。この音の特徴は、「ぶつぶつ」という共通語とはややかけ離れている。あるいは、発音のしやすさから、「ブタツク」の語頭音が無声化した可能性もあろう。

音が実際に発せられているか不明であるが、人間の言語動作に関するオノマトペとして、次のような記述も見られた。

- ・ イチャイチャシル《動サ》お世辞を言う。[美濃大垣：37]
- ・ いちゃつく／動。はしやぐこと。落ちつきなくそはそはすること。これを重ねて、いちゃいちゃするともいふ。[本巣郡：318]

この意味での「イチャイチャ」は、共通語として用いられるものではないが、おそらく江戸時代の雑俳や洒落本に用いられた「男女が、戯れたり、または言い争ったりするさま、いちゃつくさまを表す語」（『日本国語大辞典』）との意味には十分な関連性を有する。江戸時代に用いられた意味の全容はよく掴めていないが、少なくとも美濃地方中西部において、共通語と異なる意味で「イチャイチャ」が用いられていたことは確かである。

たかだか数語で、美濃方言のオノマトペの特徴を語ることはできないが、「文句」の表現が多様であることは、ひとつの特徴と言えよう。

3.2 動物や昆虫の鳴き声を捉えたオノマトペ

動物の鳴き声に関しては、豚の「ブーブー」と狐の「コンコン」が『大野町史』に記述されたり、

牛の「モー」あるいは「モーモー」が広く記述されたりするなど、共通語と同一の形式も多く見られる。また、昆虫に関しても、蟬の「ミンミン」、蜂の羽音の「ブンブン」が、それぞれ『大野町史』と『新修上石津町史』、『丹生川村史』に記述されるなど、特に方言に限定された形式でなくとも、方言として記述される例はいくつも見られる。そんな中で、次のような記述は、特徴あるものとして挙げられよう。

- ・ イーホー／馬。擬声語。幼児語。[丹生川 (平成) : 550]
- ・ ヒンコヒンコ／馬。または馬の嘶 (いななき)。擬声語・幼児語。[丹生川 (平成) : 555]
- ・ キーキー／鼠 [荘川 : 246]
- ・ キイキイ／鼠 [宮 : 883]
- ・ ケンケンサン【一様】《名》(子) きつね。[美濃大垣 : 111]
- ・ けんけんさん／狐。「けんけん」は鳴き声。「きつね」の「きつ」も鳴き声。[岐阜県方言集成 (養老郡) : 129]

馬のいななきは、共通語の「ヒヒーン」よりも荒々しく口内を震わせる様子が、後舌母音のオを含む「ホ」から感じられる。この「ホ」を含むいななきのオノマトペは、東北地方に散見される。

鼠については、『日本方言大辞典』に、山形、福島、山梨、長野、香川、愛媛、高知、大分、各県で「キーキー」との鳴き声が記されている。鼠の甲高い鳴き声は、「チューチュー」でなくとも、前舌母音「イ」を含む「キ」で十分表現される。また、馬のいななきと異なり、この「キーキー」は、鳴き声を以てその生物の名とする方法が採られている点が特徴的である。

きつね自身あるいはその泣き声を「ケンケン」と表すところも、隣県滋賀を含む近畿地方に広く見られる。県内でも西部にこの語形が記述されることは、この西からの流入によるものであることを推察する十分な根拠となる。

なお、『日本言語地図』第210図「もうもう (牛の鳴き声)」で、飛騨の一部に記述される「メーメー」ならびに郡上の「ボベー」などは、市町村史等には見られなかった。このようなオノマトペを地域的限定はあっても語彙的に確立したものとして記述する難しさが伺われる。

次に虫の鳴き声であるが、こちらは、2種類の生き物に関し特徴的なオノマトペが得られている。ただし、いずれも、鳴き声をその生物の名称に用いたもので、直接的に鳴き声のオノマトペとして記述されているわけではない。

- ・ コロコロ《名》こおろぎ。「こおろぎ」は学校で習ったことば。[美濃大垣 : 92]
- ・ けちけち〔動〕／ひぐらし蟬。[坂内 : 875]
- ・ カチャカチャメ／蝸ヒグラシ [坂内 (川上) : 913]
- ・ がっが〔動〕／〔諸家〕ひぐらし蟬。[坂内 : 874]

「こおろぎ」を「コロコロ」と呼ぶところは、秋田、群馬、長野、千葉にあり、隣県愛知県でも、「ホロ」あるいは「ホロホロ」と呼んでいるところがある。名前の「こおろぎ」の語源は定まっていないが、名称とも関連することが十分に考えられる。

ひぐらしについても、おそらくその鳴き声から、名称へと転じたと考えられる。「ツバメ」「スズメ」「カモメ」など、鳥に多く見られる「メ」という接尾辞が、「飛ぶもの」という括りに広がったかは、この一語では断定できないが、当地で昆虫に対して用いられていることは興味深い。

動物や昆虫の鳴き声にはいちいち「意味」を付与することは少ないが、鳥に関しては、各地に、人間のことばに置き換えて聞かれることが多くおこなわれる。これは、川口孫治郎の研究をはじめとし「聞きなし」と呼ばれており、ウグイスの「ホーホケキョ」は、「法華経」と結びつけて聞きなされてきたなどが知られている。

当地では、次のような「聞きなし」が記述されている。

- ・ ヒイチブ・ツキニシュ／雲雀の鳴き声。／上りには日一步，下りには月二朱。窮迫せる農民の耳にはこのように聞こえたか。[神岡：1063]
- ・ でっちびんつけ／ほおじろの擬声語。「でっちびんつけいつつけた」と鳴く。[小坂：675]
- ・ デッチビンツケ／ほほじろの擬声語。「デッチビンツケイツツケタ，イツツモツケンデケサツケタ」。奥明方小川では「デッチビンツケ二十ニチハモチツキジャ」という。[八幡：835]
- ・ ノルツケ＝ホーセ／ふくろうの鳴き声。夕方これを聞くと明日晴天だと信じられていた。[郡上方言：117]
- ・ ノリツケ・ホーセ・ホホ／梟の鳴き声。[神岡：1063]
- ・ ノリツケホーセ／ふくろの鳴き声。[八幡：837]
- ・ ノリツケホーセ／梟。[丹生川（平成）：555]
- ・ ノリツケホーセホホ／ふくろうのなき声 [河合（平成）：1118]
- ・ のりつけほうせ・ほほ／ふくろうの鳴き声。擬声語。[宮川：921]

ヒバリの鳴き声を、「日一步月二朱」と聞くところは、『日本方言大辞典』には見られないが、小野正弘編『日本語オノマトペ辞典』には、地域的な限定なく「聞きなし」としてこの語形も挙がっている。また、大分県でも、「テントー（天道＝太陽），カネモドセカネモドセ（金戻せ）」と鳴くと伝わる。なぜ、ヒバリが借金と関連するのはよくわからない。

一方、ほおじろについては、江戸時代の方言辞典越谷吾山『物類称呼』（1775）に「イッピツケージョーツカマツリソウロウ」との聞きなしが報告されていることがよく知られるが、当地では、「丁稚鬢付け」が基本である。

また、フクロウの「ノリツケホーセ」類は、『日本方言地図』299図に、青森から主に日本海側に分布し、愛媛、大分まで分布が確認される。岐阜県内でも全県に見られるほど、一般的な「聞きなし」形式である。

鳥の鳴き声については、「聞きなし」以外にも次のような記述が見られた。ちなみに「日雀」は、「ひがら」というシジュウカラ科の小鳥である。

- ・ ビービー／日雀ノ類 [西白川：(19)]
- ・ ビーン・ホロホロ／鳶の鳴き声。[神岡：1063]
- ・ ピーンホロホロ／鳶の鳴き声 [北飛騨の方言：134]

小鳥の鳴き声が無声音で「ビービー」と捉えられたり、「ピーヒョロヒョロ」のように無声音で捉えられることの多い鳶の鳴き声が「ビー」で始まったり、無声音で聞かれることの多い鳥の鳴き声に対し、当地では有声音で捉えていることが興味深い。

しかしながら、全体的に記述が少なく感じる。生き物の鳴き声は、昔から人間の近くにあった。そのわりには、県内の方言集に見られる擬声語はきわめて限定されていて、なぜ数としてこれほど少ないのかには、疑問も尽きない。

3.3 動作や物の動きに伴う音を擬したオノマトペ

直接、生物から発せられる声でなくとも、自然界には人為的であるかないかに限らず、さまざまな擬音語が記述される。中でも、県内に特有なオノマトペには、下記のようなものがある。

- かいかい (名) 擬声語。石を相うつ音。石にむかつてのみをふるう音の形容。[飛騨のことば：205]
- カイッカイ／遠くで木を切る音。[丹生川 (平成)：642]
- カタクタ／擬声語。硬い物体が存続して接触するとき。＝ガタクタ，ガタツク。[丹生川 (平成)：642]
- がたきた (副) 擬態語。がたがた。[飛騨のことば：217]
- ザッサト／ざアざアと，雨が激しく降るさま。[丹生川 (平成)：546]
- ダーダーダーダー 《副》かなり漏りママている様子。[美濃大垣：164]

実際に、擬音語として記述される語は多くないが、これらはいずれも特徴的でありながら、共通語として用いられる形式と音的対応が見られる。「カイカイ」は、「かちかち」に相当すると思われるが、子音 [k] が共通する。「カタクタ」は、「かたかた」と一音除けば同一である。一方、「ザッサト」は、「ざあざあと」と異なり無声音 [s] を含む音節が見られる点で、特徴的であり、また、雨の降る様子である「ダーダーダーダー」は、4回繰り返さず2回だけの「ダーダー」も、水が豊富にあるさまを表すために用いられるが、派生名詞に「ダダモリ」「ジャジャモリ」「ザザモリ」と歯茎あるいは硬口蓋子音をもつ形式が多く見られることからわかるように、共通語の「ざあざあ」につながっていく。音として、これらの形式は、共通語としての捉え方にかなり近接している。

一方、音から作られた名詞としても、次の形式群を挙げておかなければならない。

- ドイドイ／ガタガタの板の間。[神岡：1091]
- どんど／川の水が堰かれておちるところ [岩村：564] ([朝日 (平成)：368], [神岡：1062], [丹生川 (平成)：548], [郡上方言：108] に、同一形式の記述あり)
- ドンドコ／小川の水音を立てている堰 [明宝：1094] ([美並：759], [河合 (平成)：1115], [郡上方言：108] にも見られる)
- どんどば／小さい滝。[宮川：917]
- どんざ／名。せぎとめたる水の落つる處。[本巣郡：352]
- ドンドン／小川の水の落ちる所。[郡上方言：108]

「ドイドイ」は、『神岡町史』に、「寺林城主の苛斂誅求を免れるため、里人の妙案で各戸に入口からガタガタの長廊下を造り役人が訪れればドイドイと音がするので、直ちに餅つきなどを隠し貧を装ったという」とある。「ガタガタ」ではなく「ドイドイ」と音がすることで見分けているとあることから、違った音として聞いていたということであるが、母音 [a] のみから成る「ガタガタ」よりも、後舌母音を含む「ドイドイ」は低くこもった音という印象を受けやすいであろう。

4. 各地方言集に見られる擬態語

相対的に数の少ない擬音語と比較して、擬態語には、当地独自のものが多く見られる。

4.1 人間の状態を表すオノマトペ

人間の状態をどう音として表現するかには、大きく分けて2通りの方法がある。1つは、他の語の語幹を繰り返すなりする派生的方法であり、もう1つは、それ以外の方法による新たな生成である。

既存の語の語幹を繰り返した形式には、次のようなものがある。

- ・ こりこりした／恐れて二度としない [岐阜厚見：299]
- ・ オザオザ／おそろしいもの・お化け [清見：749] (同一語は [河合 (平成)：1098] にも)

「コリコリ」は、「懲りる」との関連が、容易に想像される。また、「オザオザ」は、「オソガイ」と関連する「オザイ」という形容詞の語幹部分を繰り返したものである。しかし、この「オザイ」自体が『丹生川村史』『神岡町史』において、「幼児語」と記述されており、幼児に対するわかりやすさのために畳語形式をとっていると考えられ、純粋なオノマトペからは外れると考えられる。やはり、オノマトペの基本は、既存の語との派生関係をもたないか、あるいは、派生語があっても、オノマトペが先あって動詞や名詞に派生するものであろう。

では、オノマトペとして当地独自に成立した形式には、どのようなものがあるのであろうか。意味別に記述していく。

まず、継続的な精神状態を表す表現を挙げる。圧倒的に「ぼんやり」の意をもつ形式が多い。紙幅を節約するために、同一形式についての記述はまとめて示す。

- ・ あんけらかん／ぼんやり [大垣：1043]
- ・ ウッソリ《名》ぼんやりした人。[美濃大垣：26]
- ・ ウロットシル《動サ》ぼんやりする。意識がぼうっとしている。[美濃大垣：48]
- ・ ケソカント／ボンヤリト [山縣郡：343] (同語は [岐阜県方言集成 (山縣郡)：173] にも)
- ・ けろっと／ぼんやりと [本巣：1301] (同語は [新修東白川：1193], [岐阜県方言集成 (稲葉郡)：74] にも。また、「茫然」との意味で [東白川：224] および [小坂：668] にも見られる。さらに、動詞形「～する」は、[岐阜県方言集成 (恵那郡)：258], [岐阜島：1096], [川島：1296] にも)
- ・ けろかん／ぼんやり [洞戸 (大正)：144] (同語は [輪之内：744] にも。さらに、「～と」の形で、[山縣郡：343], [平田：1200], [岐阜県方言集成 (山縣郡)：173], [美濃大垣：48] にも記述がある)
- ・ けろんとする／ぼんやりする。[岐阜県方言集成 (恵那郡)：258]
- ・ ケボカン／ぼんやり [八百津：757] (同語は [多治見：71] にも見られる)
- ・ けぼけぼ／茫然 [東白川：224], [西白川：(8)] (その他、対応する意味にやや差はあるが、[岐阜県方言集成 (稲葉郡)：74], [岐阜県方言集成 (可児郡)：235] にも同語が記述される。また、「～する」の語形で、[美並：752], [美濃大垣：101], [可児：1383] に記述がある)
- ・ けぼっけぼっ／ぼんやり。茫然。[岐阜県方言集成 (稲葉郡)：74]
- ・ ケボット ケボケボ／▽ぼんやり▽もたもた▽ぐずぐず [御嵩：714]
- ・ ぼけん／ぼんやり。[小坂：681]
- ・ ボケン／ぼんやり、呆然。=ボカン [丹生川 (平成)：637]

多様な語形が見られるが、「ケソカント」は、江戸時代の『俚言集覧』に東日本の「恥じたり反省したり様子もなく平然としたさま」と見られる「けそけそ」に関連すると考えられる。一方で、「ケ

ロカン(ト)」などは、共通語の、やはり「平然としたさま」を表す「けろっと」と関係があると推察される。

人間に関する状態を表すオノマトペとして、もっとも多いのがこの「ぼんやりとしたさま」を表すものであることは、何を意味するのであろうか。とかく勤勉さが求められてきた厳しい時代の貧しい地方では、心ここにあらずの状態は特に戒められるべき状態として言語化されやすかったのであろう。多様な語形の存在は、あまりにもすぐだれにでも通じる言い方を避けた可能性もある。

そのほかに、継続的な精神状態および身体の状態を表す語として、次のようなものが見つかる。

- ・ウカウカ《副》うっかり。心が落ち着いていない様子。[美濃大垣：45]
- ・イジイジシル《動サ》もじもじする。[美濃大垣：36]
- ・チョチョメク／軽率で落ち着かぬさま [明宝：1092] (同語は [美並：757], [白鳥：615] にも見られる)
- ・ツケントシル《動サ》つんとする。[美濃大垣：177]
- ・ランランシル《動サ》いらいらする。[美濃大垣：281]
- ・あつくり(副) ひどいめ。苦しみ。疲労。＝あつこり。[飛騨のことば：102] ([河合(平成)：1092] にも、「ぐったり」の意味で見られる)
- ・あつこり(副) 苦痛。疲れる。ひどいめ。＝あつくり。[飛騨のことば：102]
- ・キョトキョトシル《動サ》うろたえる。まごつく。[美濃大垣：101]
- ・クサクサシル・クシャクシャシル《動サ》くよくよする。[美濃大垣：103]
- ・くしくしする／くよくよする。[岐阜県方言集成(養老郡)：128]
- ・グジグジスル《動サ》ぐずぐずする。態度がはっきりしない。[美濃大垣：104] ([南濃：1206], [養老：834] にも、「ぐずぐずする」の意味が載る)
- ・ポチャポチャ《形動》ふっくらしている。[美濃大垣：250]

「ウカウカ」には、「うっかり」と動作様態を表す副詞が訳として当てられるが、「心が落ち着いていない様子」とあることや置語形であることから、継続的状态を表すものであろう。また、「ツケントシル」も、「ツケントシトル」など持続形式で表されることが予想される。

精神的・身体的状況の変化を表す語としては、次のような語の記述がある。

- ・げっそり／落胆する形容 [本巢：1301] [岐阜厚見：298] [平田：1199] (同語は、[輪之内：744], [養老：834], [小坂：668], [新修上石津：732] にも見られ、また、「～コク」という動詞形として、[南濃：1206], [可児：1383], [多治見：70]に、「～スル」という形で [河合(平成)：1103] にも記述がある)
- ・ガツタリ／がっくり、急に落ち込む。[丹生川(平成)：630] ([河合(平成)：1101] には、「力を落とす」, [上之保：416] には、「～セル」の形で「落たんする」と記される)
- ・ほっこり／副。疲れて、ほっとすること、ほっこりする、などと、動詞につけていふ。[本巢郡：363] (同語は [真正：1041] にも見られる)
- ・ほっこりせぬ／はかばかしくない。[岐阜県方言集成(養老郡)：136]

このうち、「ホッコリ」は、否定形で「体調がすっきりしない」という意味で用いられることが多い。「元気」の意味の「ヒズ」も、「ヒズガナイ」と否定で用いられることが多い。このような極性をもつ表現は、問題がなければ言及する必要がないからこそ、精神的・身体的状況に多く見られるので

あろう。

人間に関する継続的状况としては、性癖を表す語も多く採取される。

- おっぱっぱ／やりっぱなし [大野：1320]
- オッパサッパ／浪費癖の者を言う。[丹生川 (平成)：630] ([飛騨のことば：190] には、特に、女性について述べるとの記述がある)
- さつくり (副) さつぱり。淡白。[飛騨のことば：322] [丹生川 (平成)：632]
- おんぼり (おっとり)／おだやか [南濃：1205] [養老：833]
- こせこせ／こそこそ [大垣：1047]
- こせこせ (副) あくせく (齷齪・催促) する。心がせまく、小事に心をかけること。[飛騨のことば：295]
- コセコセスル／落ちつきのないさま [新修上石津：733]
- コシャコシャ／こまごま、こまめ。細かく気がつき休まない。[丹生川 (平成)：623] ([飛騨のことば：293] ならびに [上宝 (平成)：336] にも類義の記述あり)

「コセコセ」について複数の記述を列挙したのは、それぞれ少しずつ意味がずれているためである。「人に隠れてこっそり何かをおこなうさま」を表す「こそこそ」は、「小事に心うばわれるさま」や「落ち着きのないさま」とも異なる。県内でも意味の違いに要注意な語形である。

一時的な感覚としては、寒暖などの感覚から病状まで、幅広く俚言形が得られた。

- スコスコシル／肌寒い [新修関：898] ([大野：1309] および [美濃大垣：148] にも記述あり)
- ドカドカシル／むしむしする。気温が急に上昇して熱気を感じる。[丹生川 (平成)：548] (同語は、[飛騨のことば：469] にも見られる。[美濃大垣：196] には、「ドカッシル」という動詞形が記述される)
- ウズウズシル《動サ》かなり痛む。[美濃大垣：45] (同所には「ウズツク」という動詞形も見られる)
- シカシカセル／皮膚に不快な刺激を受ける [新修関：893] ([美濃大垣：131] にも記述あり)
- ジカジカ《副》①しかしか。切った時の鋭い痛みを表す。②太陽がジリジリと照っている様子を表す。[美濃大垣：131]
- じみじみする／動／曇って寒い。「湿」[岐阜県方言集成 (養老郡)：130] ([美濃大垣：128] にも)
- ゾゾットシル《動サ》①寒気がする。②ぞっとする。[美濃大垣：169]
- ぞみぞみする／悪寒を覚える [岐阜厚見：302] [笠松：543] [本巣：1305] [平田：1205] (同語は、[大野：1309], [新修関：901], [美濃大垣：160] にも採録される)
- ぞみっと／(副)ぞっと 悪感を催すさま [関ヶ原：137] ([美濃大垣：160] にも記述あり)
- ぞんぞがしる／ぞっとする [藤橋：180]
- ゾンゾットシル／寒気がする。[丹生川 (平成)：572] [上宝 (平成)：338]
- ひよたひよた／へべれけ。泥酔。[岐阜県方言集成 (大垣市)：57] ([大垣：1047] にもあり)
- キヤーツツシタ／ずきつと痛む [八百津：760]

感覚を表すオノマトペは、当然のことながら動詞が多い。ここでは、「シル (する)」に相当する語のみを挙げたが、ほかにも、「むずむずする」や「ぐずつく」あるいは「そろそろ動き出す」など当地特有の意味をもつ「ムズツク」が、[朝日 (平成)：372] および [丹生川 (平成)：584] に見られる。

人間は、もっとも身近な存在である自らを含む人間の状態について、その様態をこと細かに表したがるものである。特に、感情や感覚は、多様にオノマトペとして表現できるからこそ、微細な表現を、語彙の伝来に疎いどんな僻邑でも表せる。装置としてのオノマトペは、感情・感覚の語彙化にも寄与しつつ地域語彙を豊かにすることに一役買っている。

4.2 人間の動作を表すオノマトペ

次に、動作を表すオノマトペを挙げる。

もっとも多いのが、この「溺れる」との意味をもつ語である。広く「アババ」の形で用いられ、県外でも、新潟、富山、長野に同形式が見られる(『日本方言大辞典』による)が、この語形は、「アバアバ」という畳語形から縮約したもので、「アブアブ」や共通語の「アップアップ」という語と関連が推察される。

- あば(あ)ばこく／おぼれる [坂下小史：210]
- アバアバツク／溺れる。[神岡：1099]
- あばば／おぼれる [池田：900] [武芸川：1080] [新修武芸川：1138] ([岐阜厚見：292], [本巣：1293], [武儀：734], [御嵩：695] にも、同語形の記述あり)
- あばこく／おぼれる。[多治見：47]
- アブアブシル【危危】《動サ》おぼれる。[美濃大垣：28] ([南濃：1202] と [養老：829] には、「～スル」の形で、また、[洞戸(昭和)：1079] には「～コク」の形で採録される)
- アップアップ／水に溺れる [上宝(平成)：332] ([丹生川(平成)：567] には、幼児語との記述もある。また、[飛騨のことば：103] には、死にかけの魚の状態を表すとの記述が見られる)

動詞形は基本的に除外しているが、上記の他、[各務原：471], [岐阜芥見：411], [岐阜鷺山：781], [笠松：531], [川島：1286], [平田：1191], [可児：1379], [新修関：867], [八百津：759], [金山：1285] に、「アババコク」が、[揖斐川：890], [久瀬：1274], [藤橋：176] に「アババスル・アババシル」が、[美並：746], [河合(平成)：1093] に「アババツク」([河合(平成)：1093] には「アボボツク」も)が採録される。岐阜県は、山国であると同時に清流の国でもある。その特徴が表れたものである。

ほかには、次のような畳語形による、様態副詞としてのオノマトペが観察される(「カギツク」については、「カギカギする」という注記が該当する)。

- エガエガ／よたよた。不安定な歩き方を言う。[丹生川(平成)：568]
- カギツク／もたもたする「カギカギする」[白鳥：600]
- コシコシ《副》早く。急いで。丁寧な表現。[美濃大垣：169]
- ゴトゴト《副》もたもた。ものごとがはかどっていない様子。[美濃大垣：121]
- つかつかと／慌てて急いで [朝日(平成)：373] (むしろ「ツカツカ」は、「あわてもの」という名詞として、[宮川：910], [河合(平成)：1113], [朝日：475], [丹生川(平成)：635] に見られる)

様態を表す動詞のみならず、「シル(する)」とともに用いられて動作を表すものも散見される。

- コネコネシル《動サ》横から口をはさむ。[美濃大垣：121]
- ホイホイシル《動サ》ちやほやする。[美濃大垣：246] [久瀬：1276]

- ・ グタグタシル《動サ》だらけた姿勢をしている。だらっとする。[美濃大垣105]
- ・ ニコホヤシル《動サ》(古)にここにこする。[美濃大垣：212]

動作を表すオノマトペであるから、動詞のみが採録される場合もある。また、「コソツク」のように、対応する副詞「コソット」は、共通語と共通するが動詞形が独特な語形をもつものもある。

- ・ ウトツク・ウロコク《動五》うろたえる。まごつく。[美濃大垣：101]
- ・ グザツク・グダツク・グドツク【愚図】《動五》ぐずぐず言う。やんちゃを言う。[美濃大垣：104]
- ・ こそつく／こそこそする [大野：1321] [南濃：1207] [藤橋：179] [池田：902] ([揖斐川：891]には、「落着かない」の意味で見られる)

イタリア語では、英語からの外来動詞を、もっとも頻用される-are型活用をする動詞として受容する。たとえば、英語の‘to realize’は、‘realizzare’となってはじめて、イタリア語となる。方言でも同じで、「～ツク」や「～コク」などを語幹に付けることで当地の方言となるのである。

4.3 事物の状態を表すオノマトペ

事物の状態を表す語には、次のようなものがある。

- ・ ガジガジ／歯または物の隙間で爽雑物が碎ける意。[丹生川(平成)：642]
- ・ カバカバ《形動》こびりついている。[美濃大垣：92] (「カバカバンナル」も記述あり)
- ・ けらけら(形動・副) 雪上のよくすべること。[飛騨のことば：280]
- ・ きんきん／あたらしい。新。[岐阜県方言集成(岐阜市)：11]
- ・ ぐさぐさ／大きくてゆるい、帽子がぐさぐさ [関小屋名：385] (「しまりのないこと」の意で [新修上石津：732] に、また、「ゆるい」の意で [岐阜県方言集成(岐阜市)：11] に見られる)
- ・ グザグザ／ぐずぐず。愚痴をこぼすさま。[丹生川(平成)：631]
- ・ クゾクゾク／屑々。重複語。原形を止めぬまでに碎けたさま。[丹生川(平成)：643]
- ・ グワグワ／ぐらぐら、物の安定しないさま。[丹生川(平成)：643]
- ・ コケコケ／フリル [明宝：1085]
- ・ ごじごじ／いもなどの半煮えの状態の時の固さをいう。[多治見：73]

「キンキン」などは、「近々」との可能性もあり、擬態とは言えないかもしれないが、それでも、畳語という特徴を有している点は見逃せない。

ここで、このような事物の状態を表すオノマトペは、方言集に記述されないものが多いことを指摘しなければならない。たとえば、「カレーライスなどが水っぼいさま」を表す「シャビシャビ」は、ほぼ、美濃地方では知らない人がいないほど一般的であるが、共通語のオノマトペ辞典はおろか、どんな岐阜県内の方言集にも記述がない。また、「信号の点滅するさま」は、「パカパカ」のほかに、「ポカポカ」とも言われるが、これもまた記述がない。服の袖が鼻水等で固くなる「カピカピ」や、ズボンなどが非常にきつい「キモキモ」なども同様である。

なぜこのような記述の限定が生じるのか。それは、上記の「ポカポカ」について聞くと、同じ出身地でも使う人と使わない人が混在し、ある土地の方言であるとの認識が得られにくく、事物自体を表す俚言のような語としての固定化が進みにくいためと考えられる。また、方言語彙「キモイ(きついの意)」から臨時的に作られる「キモキモ」のような語は、なかなか方言集に拾うべき語との認識は

得られにくいのであろう。

畳語形以外では、次のような語が見られる。

- おんぼろ (さんぼろ) (名) ぼろぼろ。衣類等が破れて、ぼろぼろになっていること。ぼろぼろの衣服の形容。(椿原) [飛驒のことば：203] (類似の意味で, [丹生川 (平成)：585] や [河合 (平成)：1098] にも同語が見られる)
- グシャコイ / くぬかる [美濃加茂：318]

さらに、動詞形では、次の記述を特に挙げておかなければならない。

- ギラウツ / 雪路が凍ってギラギラに光っている形容 [河合 (平成)：1102]
- ゲラウツ / 道が凍りついてギラギラに光っている形容。雪道などを踏み固めてキラキラと光らせ、すべりやすくする。[神岡：1061]

飛驒地方には、雪の語彙が多いように、雪に関するオノマトペもまた散見される。地域独自の風土が生み出す貴重なオノマトペである。このような気候風土の差がある以上、その地その地のオノマトペがあってしかるべきなのである。

4.3 程度を表すオノマトペ

最後に様態の程度を表すオノマトペをまとめて挙げる。

- きわきわ / めっきりと [岩村：553]
- こつとり (副) ぬくぬくと十分に暖まる。[飛驒のことば：300]
- かつかつ / 一ぱい一ぱい [岩村：552] ([丹生川 (平成)：642] にも、「やっと、すれすれ」の意で見られる)
- ごいごい (副) 無闇矢鱈に。ぐんぐん。[飛驒のことば：283] ([上宝 (平成)：336] にも「ぐんぐん」との記述あり)
- ゴッコト / ごうごうと、どんどんと、しきりに。[丹生川 (平成)：644] ([上宝 (平成)：336] にも、「どんどんと」の意味で記述がある。また, [飛驒のことば：299] もほぼ同義の記述あり)

変化の程度を表すものとしては上記のようなものが挙げられる。「カツカツ」などは、共通語の「どうにかこうにか生活が成り立つ」という意味と同一であるのかどうなのか、判別しがたい。オノマトペの場合に限らず用例は、方言集にぜひほしいところであるが、同時に、どこまで使えるのかを、特にオノマトペに関しては詳述する必要がある。

結果としての量を表すものには次のようなものがある。

- おっかおっか [副] / たくさんに。[坂内：887]
- キチキチ 《形動》 ちょうど一杯。[美濃大垣：99]
- きちきちいっぱあ / びっしりといっぱい。[多治見：66]
- ゴッキリ / すっかり・ことごとく。[八幡：832] (類義にて, [白鳥 (石徹白)：605] [白川村：1181] [岩村：555] [飛驒のことば：298] にも記述が見られる)
- こっぺり / 残らず [真正：1037] [揖斐川：891] (類義にて, [岐阜：433], [大野：1321], [新修上石津：734], [武儀：739], [美並：752], [明宝：1086], [白鳥：606], [神岡：1111], [飛

驛のことは：300], [岐阜県方言集成 (岐阜市)：13], [岐阜県方言集成 (恵那郡)：259] にも記述がある)

- ・ ゴッペリコ／全部。[神岡 (山之村)：1138]
- ・ ごべっと／すっぺりと [大野：1321]
- ・ すつぺり (副) 総べて。残りなく。すつかり。→ごつきり。[飛驒のことは：376]

全国でこの類の副詞は多様な方言語形があり、また、比較的短期間で移り変わっていくように、当地にも多様でまた似たような形の語が多く見られる。おそらく、「めちゃくちゃ」に相当する類まで広げれば、まだまだ多様な語形が採取されるであろう。それは、すでにオノマトペという範疇からは広がりすぎているが、その連続性はよく認識しておくべきである。

5. おわりに

本考察では、岐阜県方言特有のオノマトペを中心に、県内各方言集の記述を集め分析を試みた。

結果として、「文句」に関するオノマトペが美濃方言に多く、「雪」に関するオノマトペが飛驒方言にいくつか見られるなど、地域性のあるオノマトペ表現を描き出すことができた。また、人間の感情・感覚を擬した表現が当地でも多く見られ、このようなオノマトペで表現することが、概念化・言語化に一役買っているとの仮説を提唱した。さらには、方言独自の接辞で、他の地域でも使われる語を地域で通用しやすい語に変更することも、当地では多く行われていることを指摘した。

本文中にも示したように、このようなオノマトペは、語として「移ろいやすく掴みにくい」性質を有している。たとえば、山田 (2008) では、「鉛筆の先がとがったさま」を表す「トントン」や「ピンピン」「チョンチョン」や、「洋服のサイズが小さいさま」を表す「キツキツ」「キチキチ」「キュンキュン」類、さらには、「目が乾いているさま」を表す「シパシパ」「ジバジバ」なども報告した。学生から気付けられる語形も多い。今後も、方言集に採取された語形以外に丹念に調査を続け採取・記述をしていかなければならない。

【付記】

本考察は、2011年度～2013年度科学研究費基盤研究 (C)「岐阜県方言データベース構築ならびに総合記述に関する研究」(代表：山田敏弘、課題番号23520549) の成果の一部である。

【参考文献】

- 小野正弘 (2007)『日本語オノマトペ辞典』小学館
- 川越めぐみ (2005)「東北方言オノマトペの特徴についての考察－宮沢賢治のオノマトペの場合－」『言語科学論集』9
- 竹田晃子 (2012)「円滑な医療コミュニケーションのための方言集：『東北方言オノマトペ用例集』の取り組み」『日本方言研究会研究発表会発表原稿集』94, pp.55-58
- 山田敏弘 (2008)『ぎふ・ことばの研究ノート7～岐阜と愛知の方言地図集』
- 山田敏弘 (2013)『岐阜県方言辞典Ⅳ～オノマトペ、幼児語、あいさつ・定式表現、比喩表現』科研費報告書

【引用方言資料】(括弧内は本文内で用いた略称)

- 杉崎好洋・植川千代『美濃大垣方言辞典』(美濃大垣)
- 荒垣秀雄 (1932)『北飛驒の方言』刀江書院
- 土田吉左衛門 (1959)『飛驒のことは』濃飛民俗の会
- 郡上高校方言研究会編 (1952)『郡上方言第1集語彙編』

瀬戸重次郎 (1934) 『岐阜縣方言集成』 大衆書房

多治見ことば編集委員会 (1974) 『多治見のことば』 多治見市教育委員会 (多治見)

郡市町村史類 (刊行年順)

『東白川村誌』(1914)／『山縣郡志』(1918)／『本巢郡志』(1923)／『西白川村誌』(1924)／『洞戸村誌』(1925)／『大垣市史 中巻』(1930)／『朝日村誌』(1956)／『笠松町史 第三巻』(1957)／『岩村町史』(1961)／『郡上八幡町史 下巻』(1961)／『芥見郷土誌』(1961)／『丹生川村史 全』(1962)／『平田町史 下巻』(1964)／『岐阜県小坂町誌』(1965)／『白川村史』(1968)／『宮村史』(1968)／『揖斐川町史 通史編』(1971)／『久瀬村誌』(1973)／『金山町誌』(1974)／『莊川村史 下巻』(1975)／『本巢町史 通史編』(1975)／『真正町史 通史編』(1975)／『清見村誌 下巻』(1976)／『上之保村誌』(1976)／『白鳥町史 通史編 下巻』(1977)／『美濃加茂市史 民俗編』(1978)／『島郷土史』(1978)／『池田町史 通史編』(1978)／『養老町史 通史編 下巻』(1978)／『武芸川町史』(1979)／『可児町史 通史編』(1980)／『宮川村誌』(1981)／『輪之内町史』(1981)／『八百津町史』(1982)／『川島町史 通史編』(1982)／『藤橋村史 下巻』(1982)／『南濃町史 通史編』(1982)／『美並村史 通史編 下巻』(1984)／『御嵩町史 民俗編』(1985)／『各務原市史 考古・民俗編 民俗』(1985)／『大野町史 通史編』(1985)／『厚見郷土史』(1987)／『洞戸村史 上巻』(1988)／『岐阜市鷺山史誌』(1988)／『坂内村誌 民俗編』(1988)／『飛騨河合村誌 通史編 全』(1990)／『坂下小史』(1991)／『武儀町史』(1992)／『関ヶ原町史 通史編別巻』(1992)／『明宝村史 通史編 下巻』(1993)／『新修 関市史 民俗編』(1996)／『丹生川村史 民俗編』(1998)／『新修 上石津町史』(2004)／『上宝村史 下巻 -資料編-』(2005)／『新修 武芸川町史』(2005)／『神岡町史 通史編Ⅱ』(2008)